

# 王陵の地域史研究

～飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅰ～

2006

## 例 言

- 1、本書は奈良県高市郡明日香村に所在するカヅマヤマ古墳と奈良県桜井市に所在する庚申塚古墳の測量調査報告書である。
- 2、測量調査に際しては、各古墳の土地所有者のご理解あるご協力をいただき、順調に進行、完了したことに深謝の意を表したい。また調査に際してご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。  
相原嘉之、猪熊兼勝、岩本圭輔、岩本龍一、上田俊和、奥田 尚、米田孝彰、米田隆夫、嶋岡文次、清水真一、伊達宗泰、納谷守幸、萩原儀征、橋本輝彦、前坂尚志、増田頼一
- 3、遺跡分布図は、国土地理院発行の二万五千分の一「畝傍山」・「桜井」と奈良国立文化財研究所発行の「地の窪」「山田寺」(1:1000)を使用した。
- 4、本書所収の座標値は世界測地系を、高さは海拔高を示している。
- 5、カヅマヤマ古墳、庚申塚古墳の石材鑑定には奥田 尚氏(橿原考古学研究所共同研究員)からご教示を賜った。
- 6、本書の執筆は丹 俊詞、松谷久史、西光慎治があたり、文責は各文末に示した。
- 7、本調査の関係書類・図面等は西光慎治が保管している。
- 8、本書の編集は西光慎治が担当した。

## 目 次

例言 目次 .....	(1)
第1章 調査に至る経緯と目的 .....	西光慎治 (2)
第2章 地理的・歴史的環境 .....	西光慎治 (3)
第3章 カヅマヤマ古墳測量調査報告 .....	松谷久史・西光慎治 (6)
第1節 はじめに .....	(6)
第2節 測量調査成果 .....	(6)
第3節 表採遺物 .....	(9)
第4章 庚申塚古墳測量調査報告 .....	丹 俊詞・西光慎治 (10)
第1節 はじめに .....	(10)
第2節 測量調査成果 .....	(10)
第3節 表採遺物 .....	(10)
第5章 総括 .....	西光慎治 (16)

## 挿図目次

第1図：飛鳥地域周辺遺跡分布図(1:25000)	第8図：庚申塚古墳周辺測量図(1:200)
第2図：カヅマヤマ古墳位置図(1:2000)	第9図：庚申塚古墳表採石材(1:4)
第3図：カヅマヤマ古墳周辺地籍図	第10図：大和における磚積石室墳分布図
第4図：カヅマヤマ古墳墳丘測量図(1:300)	第11図：庚申塚古墳表採遺物(1:2)
第5図：カヅマヤマ古墳表採石材(1:3)	第12図：大和の磚積石室墳(1)
第6図：庚申塚古墳位置図(1:2000)	第13図：大和の磚積石室墳(2)
第7図：庚申塚古墳周辺地籍図	第14図：大和の磚積石室墳(3)

## 第1章 調査に至る経緯と目的

飛鳥地域には多くの後・終末期古墳が分布していることは周知のことである。しかし未だ資料化されていないものも少なくない。こういった中、1982(昭和57)年以降奈良県立橿原考古学研究所や関西大学考古学研究室等によってキトラ古墳をはじめ牽牛子塚古墳や岩屋山古墳、塚本古墳などの測量調査が実施されている。こういった測量調査は基礎資料の資料化として地域史研究にとって重要な役割を担っていることは言うまでもない。

今回の調査は筆者が飛鳥と周辺地域の地域史像の解明に向けて取り組んでいる「飛鳥地域の地域史研究」の一環として企画し、土地所有者のご厚意を得るとともに花園大学考古学研究室の有志の協力のもと測量調査を実施した。そして測量調査の対象地として磚積石室墳と考えられるカヅマヤマ古墳と庚申塚古墳を選定した。両古墳は飛鳥盆地を挟んで西にカヅマヤマ古墳、東に庚申塚古墳が位置している。カヅマヤマ古墳は高取川左岸の低位丘陵の南側斜面に築かれており、盗掘坑周辺には漆喰の付着した結晶片岩が散乱している。また庚申塚古墳については山田寺北側の低位丘陵上に流紋岩質溶結凝灰岩が散乱しており、両古墳とも早くから磚積石室墳ではないかと注目されていた。これまで明日香村内では磚積石室墳は確認されておらず、また隣接してある庚申塚古墳についてもその詳細については不明な点も多かった。今回、飛鳥地域の終末期古墳を考える上で両古墳の占める位置の重要性を鑑み、測量調査を実施したものである。

調査は通常勤務に支障のないことを記したため休日や年末・年始を利用する断続的な調査となった。測量調査は平成10年から平成14年にかけて約4年間、延べ76日間行った。(西光)

### 【調査体制】

測量調査は各現場の総括、副総括が中心となって実施した。調査体制は以下の通りである。

	カヅマヤマ古墳	庚申塚古墳
担当者	西光慎治	
総括	伊藤早苗・松谷久史	丹俊詞
副総括	北村勇人	—
調査員	市元 壘、大野宏和、大村 喬、川部浩司、丹俊詞、松田 繁、安永周平、加賀谷 央、塩谷磨智子、田窪一城、松谷久史、北村勇人、福井順子、青木邦彦、穂田和樹、石川真紀、小山貴広、山本謙悟 (順不同・敬称略)	

### 【見学会の開催】

参加者を中心に測量調査の深化と比較検討を行うため、見学会を実施した。見学した主な古墳は以下の通りである。

赤坂天王山古墳、秋殿古墳、岩屋山古墳、打上古墳、乾城古墳、艸墓古墳、牽牛子塚古墳、マルコ山古墳、小谷古墳、菖蒲池古墳、嶽山古墳、谷首古墳、東明神古墳、塚本古墳、花山西塚古墳、花山東塚古墳、舞谷2号墳、真弓鐘子塚古墳、文殊院西古墳、文殊院東古墳

### 【勉強会の開催】

参加者を中心に各自のテーマについて発表を行い、深化に努めた。

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 【地理的環境】

明日香村は奈良盆地の南端に位置しており、背後には龍門山地が連なっている。龍門山地は奈良盆地と吉野山地を二分する位置にあり中央構造線にそって吉野川が存在し、途中紀ノ川と名を変えながら西流していく。龍門山地は奈良県のほぼ中央を東西に伸びており、奈良盆地と吉野山地とを繋ぐ主要幹線道は現在では芦原峠(芦原トンネル)となっている。古代には下ツ道から続く、巨勢路(紀路)や宮滝へと続く芋ヶ峠が主であり、これらの幹線道は村内を貫いていることから飛鳥は交通の要衝であったことが窺える。龍門山地は龍門岳(904m)を主峰にして、北に熊ヶ岳(904m)、経ヶ塚山(889m)、音羽山(801m)が連なり、東には多武峰の御破裂山(619m)を、西に高取山(583m)を配している。明日香村は御破裂山、高取山から派生した樹枝状に伸びた低位丘陵に抱かれた地域に位置している。

明日香村内の主要河川は南東から村内を縦断するように一級河川の飛鳥川が、西には高取川があり、それぞれ北流している。飛鳥川は多武峰と高取山から連なる芋ヶ峠、竜在峠付近に源を發し途中、冬野川や唯称寺川と合流して、甘檜丘の東方で流れを北西に屈曲させながら北流を続けていく。一方、高取川には桧前盆地を流れる桧前川が注ぎ込んでいる。

桧前盆地は標高100mの等高線に囲まれた1km四方の小氾濫原の支谷に形成されており、西側には幹線道の下ツ道が接している。高取川の西方にある貝吹山から伸びる尾根筋には高市郡と葛城郡との郡界となる曾我川が北流しており、大字寺崎付近で越峠付近に源を發する前川が曾我川に流れ込んでいる。

### 【歴史的環境】

#### 【縄文時代】

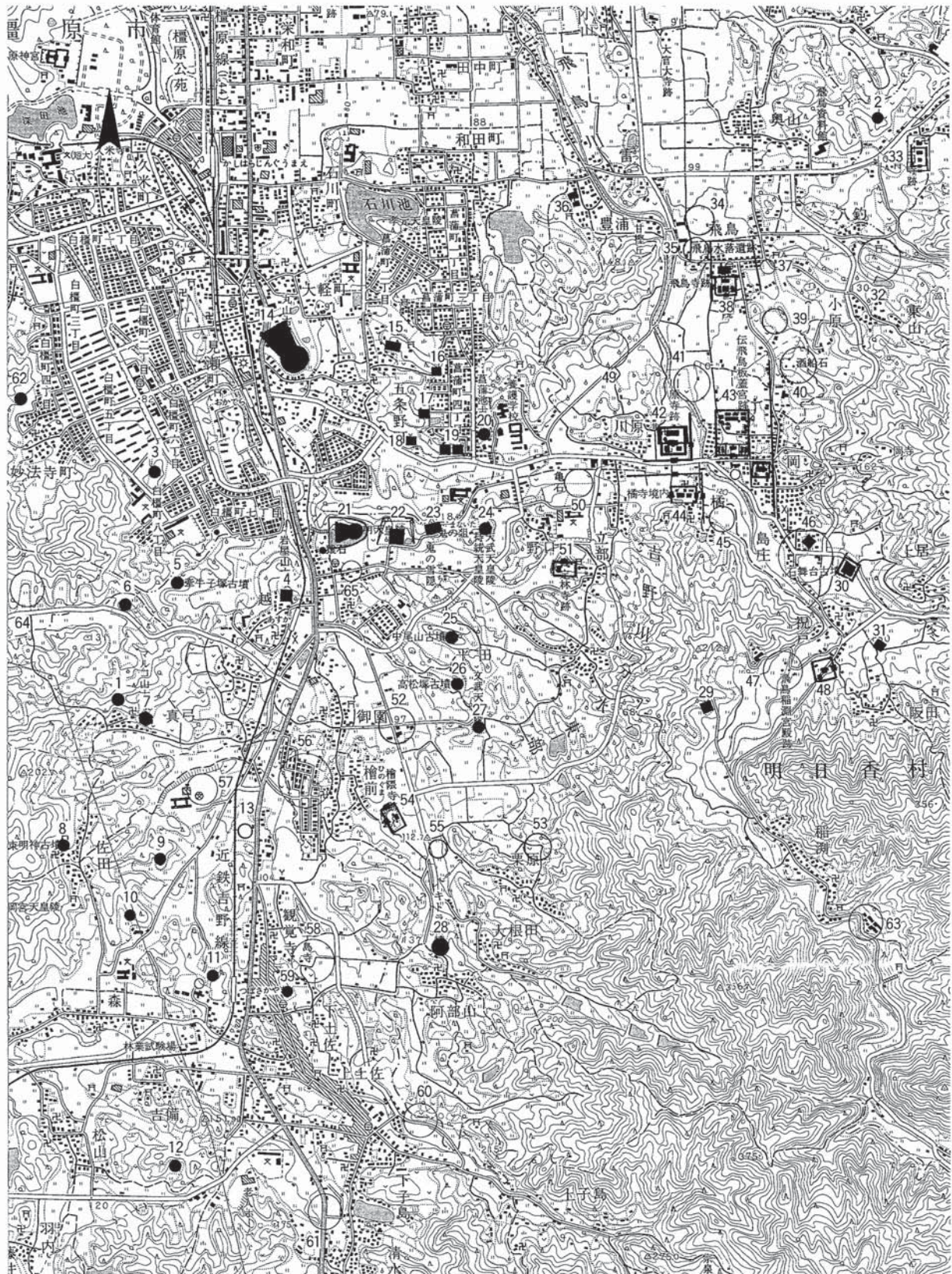
明日香村内では飛鳥川や高取川流域を中心として縄文時代から人類の生活の営みが行われており飛鳥川流域では中期～晩期にかけての稲淵ムガンダ遺跡・島庄遺跡・飛鳥京下層遺跡・大官大寺下層遺跡が存在し、集石遺構や竪穴式住居などが検出されている。また高取川流域では縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した桧前脇田遺跡などがある。

#### 【弥生時代】

飛鳥川流域では前期から後期にかけて飛鳥京跡(岡遺跡)や山田道遺跡で確認されており、島庄遺跡では多角形プランを有した竪穴住居が検出されている。高取川流域になると中期の御園アライ遺跡などがある。

#### 【古墳時代】

古墳時代ではまとまった集落遺跡は確認されていないが飛鳥寺下層遺跡や飛鳥京下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数基、検出されている。飛鳥地域、特に飛鳥川流域では右岸の段丘上を中心に縄文時代から人々が生活を営んできたが、6世紀末に飛鳥真神原に飛鳥寺が建立されて以降、寺院や宮殿が立ち並ぶようになる。古墳については飛鳥川の支流、冬野川流域には横穴式石室を主体とした約200基を越える細川谷古墳群が展開している。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や穹窿式石室を有し、ミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。また冬野川下流域には一辺約60mの方墳の石舞台古墳が存在し、冬野川を挟んで都塚古墳・塚本古墳など家形石棺を有した6世紀後半から7世紀初頭にかけての古墳が築かれている。その他、寺川の支流中の川の上流部には八釣・東山古墳群が展開しており、多くの馬具や



- 1、カツヤマ古墳 2、庚申塚古墳 3、沼山古墳 4、岩屋山古墳 5、牽牛子塚古墳 6、真弓鎌子塚古墳 7、マルコ山古墳
- 8、東明神古墳 9、出口山古墳 10、森カシタニ塚古墳 11、向山1号墳 12、松山古墳 13、坂ノ山古墳群 14、五条野丸山古墳
- 15、植山古墳 16、五条野内垣内古墳 17、五条野城脇古墳 18、五条野向イ古墳 19、五条野宮ヶ原1・2号墳 20、菖蒲池古墳
- 21、梅山古墳 22、カナツカ古墳 23、鬼の俎・雪隠古墳 24、野口王墓 25、中尾山古墳 26、高松塚古墳 27、塚穴古墳 28、キトラ古墳
- 29、塚本古墳 30、石舞台古墳 31、都塚古墳 32、八釣・東山古墳群 33、山田寺 34、石神遺跡 35、飛鳥水落遺跡 36、豊浦寺跡
- 37、飛鳥東垣内遺跡 38、飛鳥寺跡 39、飛鳥池遺跡 40、酒船石遺跡 41、飛鳥京跡苑池遺構 42、川原寺跡 43、飛鳥京跡 44、橘寺跡
- 45、東橘遺跡 46、島庄遺跡 47、飛鳥福淵宮殿遺跡 48、坂田寺跡 49、甘樫丘東麓遺跡 50、西橘遺跡 51、定林寺跡 52、御園遺跡群
- 53、吳原寺跡 54、檜隈寺跡 55、檜隈門田遺跡 56、檜前上山遺跡 57、佐田遺跡群 58、観覚寺遺跡 59、稲村山古墳 60、ホラント遺跡
- 61、清水谷遺跡 62、小谷古墳 63、稲淵ムガンダ遺跡 64、与楽古墳群 65、平田キタガワ遺跡

第1図 飛鳥地域周辺遺跡分布図(1:25000)

ガラス玉などが出土している。また曾我川の支流、前川の上流部ではミニチュア炊飯具等が出土した与楽古墳群や石室の両側に開口部を有した真弓鐘子塚古墳など貝吹山(210m)の南側斜面には数百基の古墳が展開しており、東漢氏の奥津城と考えられている。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳や坂ノ山古墳群などが点在している。

### 【飛鳥時代】

7世紀に入ると高取川左岸(真弓丘陵)から右岸(桧前盆地)にかけて多くの終末期古墳が築かれるようになる。真弓丘陵では精美な横穴式石室を有した岩屋山古墳や凝灰岩の巨石を刳り貫いた牽牛子塚古墳があり、石室内からは大量の夾紵棺片とともに七宝亀甲形座金具や玉類が出土している。更に南方には六角形を呈したマルコ山古墳や凝灰岩の切石を積み上げた東明神古墳、骨蔵器を内蔵したとされる出口山古墳などが点在している。磚積石室墳のカヅマヤマ古墳はこの一角に所在している。桧前盆地になると梅山古墳からカナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓が東西に並んで築かれており、更に南方には八角形墳で火葬墓の中尾山古墳や極彩色の壁画で有名な高松塚古墳が存在している。更に高松塚古墳から1.5km南には四神や天文図、十二支像が描かれたキトラ古墳がある。

飛鳥盆地では蘇我氏の氏寺の飛鳥寺をはじめ、山田寺や豊浦寺、坂田寺、定林寺などの多くの寺院が築かれる。天武朝には大官大寺などの官寺も造寺されていく。また飛鳥川右岸の高位段丘面には大化改新のクーデターの舞台となった飛鳥板蓋宮や斉明天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇の飛鳥浄御原宮や苑池などが造営される。これらの宮殿に隣接して酒船石遺跡や飛鳥池遺跡がある。酒船石遺跡では酒船石を中心に石上山石を使った石垣が丘陵の周囲約700mにわたって巡っており、また丘陵の北側裾部からは亀形石造物を中心とした導水施設や石敷き広場が検出されるなど二槻宮との関連も注目されている。また石上山石を運んだ狂心渠と考えられる幅約10mの運河が飛鳥東垣内遺跡で検出されている。飛鳥池遺跡では炉跡や石組溝、掘立柱建物の遺構の他、金属・ガラス玉・鋳型・大量の木簡、そして鋳造貨幣では和同開珎より遡るとされる「富本銭」などが出土しており、飛鳥時代の官営工房の実態が明らかになりつつある。この他、東方の丘陵地には東山マキド遺跡や小原シウロ遺跡があり、7世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また西橋遺跡では7世紀後半～末にかけての庇付掘立柱建物や大量の木簡が出土している。宮殿域の中心部から離れた桧前盆地では東漢氏の氏寺とされる檜隈寺や呉原寺などの寺院が建立されるようになる。隣接してある観覚寺遺跡や清水谷遺跡からは大壁住居やオンドル遺構、方形池などが検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

### 【奈良時代以降】

西暦694年、政治の舞台は飛鳥京から藤原京へ、更に藤原京から平城京に移るようになると飛鳥地域では顕著な遺構は認められなくなるが、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代から淳仁朝の「小治田宮」が奈良から平安時代にかけて存続していたことも明らかとなっている。中世以降になると南北朝期に越智氏が越智城を構え、飛鳥周辺にも貝吹山城や佐田城が築かれるようになる。また越智氏は高取山に逃げ城的な性格の高取城を築き、その後本多氏、植村氏によって改修を重ねながら高取藩の居城として幕末まで存続していく。飛鳥盆地には砦的性格をもつ奥山城や飛鳥城、雷城や岡城、そして野口城や貝吹城、観覚寺城が築かれるようになる。近世になると西国七番札所である岡寺(龍蓋寺)の門前町が賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。(西光)

### 第3章、カヅマヤマ古墳測量調査報告

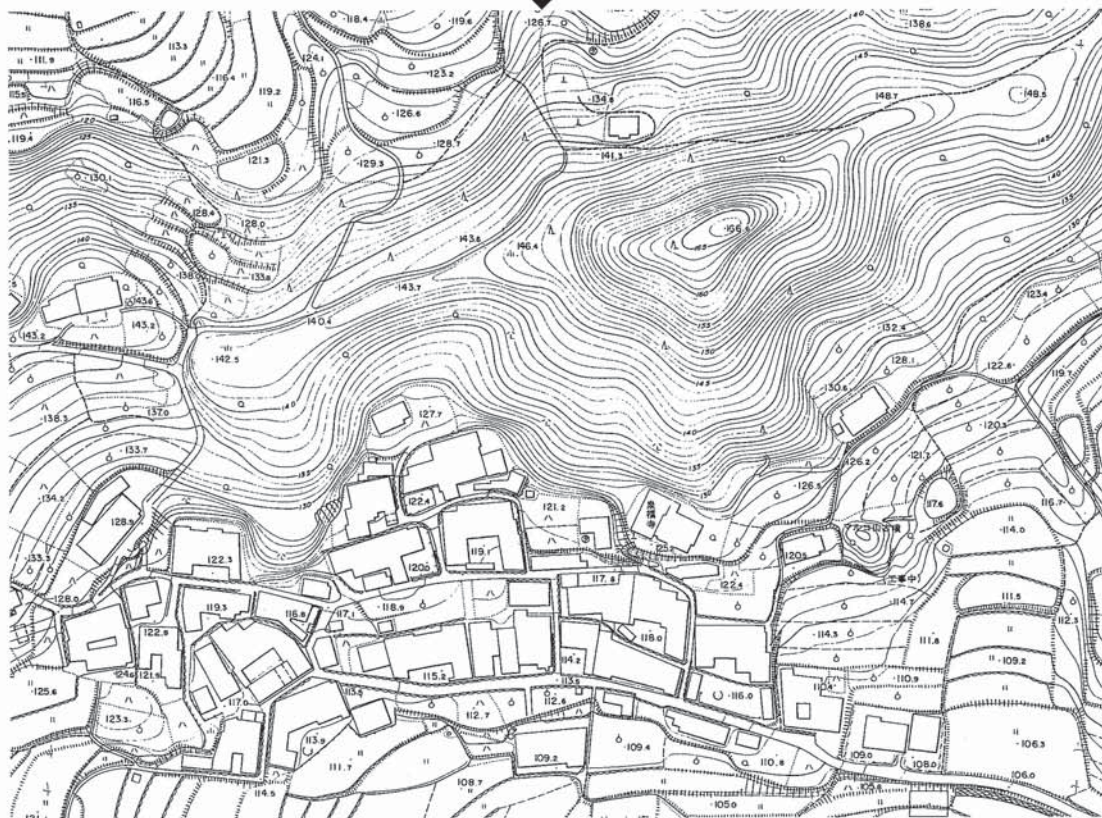
#### 第1節、はじめに

本墳は奈良県高市郡明日香村大字真弓小字カヅマヤマ232-1番地他に所在する終末期古墳である。カヅマヤマ古墳は『奈良県遺跡地図』に17-A-585と記載されていた古墳で遺跡番号だけの古墳名称であったため今回の測量調査を機に小字名をとって仮称することとする。カヅマヤマ古墳の南東には六角形墳のマルコ山古墳が存在している。マルコ山古墳とカヅマヤマ古墳は同じ低位丘陵の南側斜面に築かれており、尾根を挟んで東西に並列している。

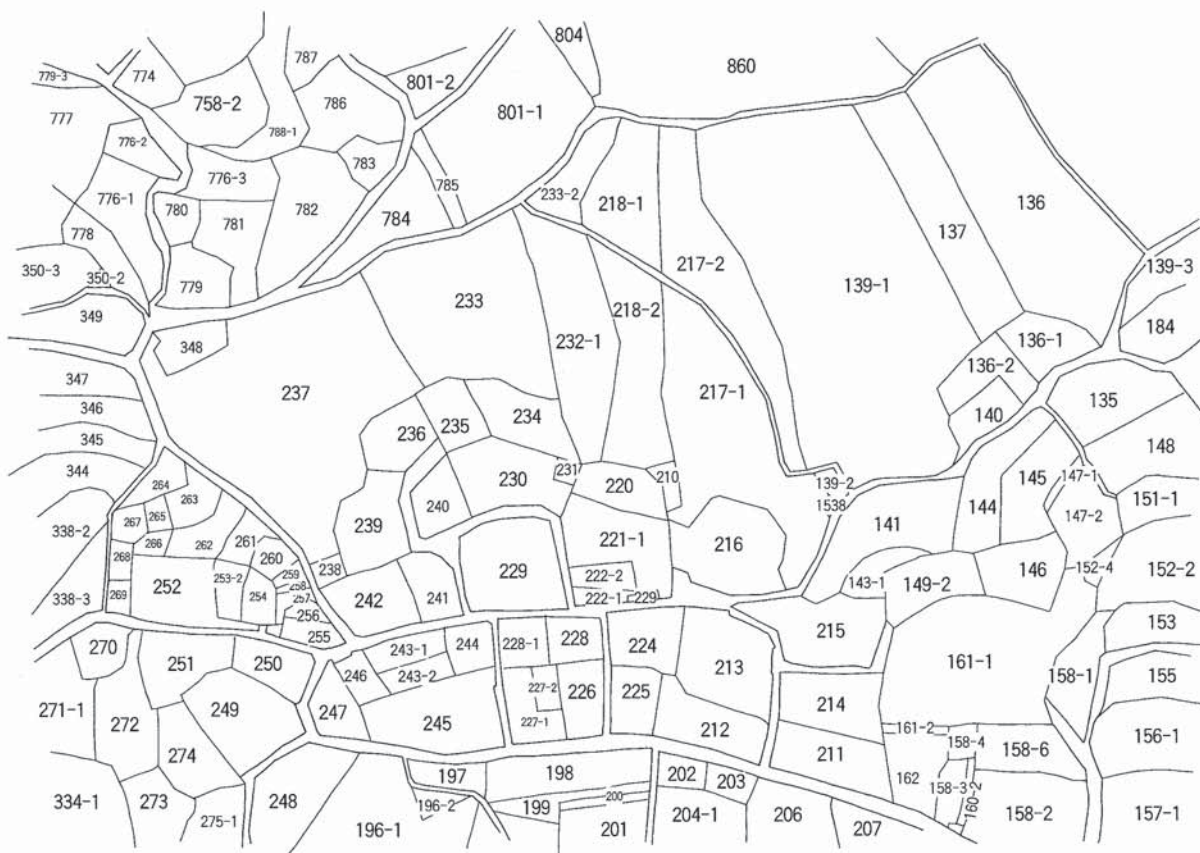
カヅマヤマ古墳については大正12年に発行された『高市郡古墳誌』に「カヅマ塚 現在は雑木林となっている。山の峰の所に深さ三尺五寸、周囲二間位の発掘した跡がある。これは二三十年程前に誰か掘って見たらしいが、中には何物もなく、土中から雲母系岩石の破片が出たのであったらしい。」と記されており、明治20～30年頃に盗掘を受けていることがわかる(高市郡役所1923)。その後、1972(昭和47)年に奈良県教育委員会が、1986(昭和61)年には奈良県立橿原考古学研究所による分布調査が行われ、カヅマヤマ古墳については直径14.5m、高さ3mの円墳で墳丘には葺石を施し、埋葬施設は緑泥片岩に漆喰を塗布した石室をもつ古墳であると報告されている(関川・ト部1987)。現在、カヅマヤマ古墳の墳丘部分は半壊し、墳頂東側には大規模な盗掘坑が存在している。周囲には石室材と考えられる漆喰の付着した石墨片岩や絹雲母片岩等が多数散乱しており、地元ではこれらの石材を「蒲団石・平石」と呼ばれている。墳丘の周辺には戦後、杉や檜が植林されその後、竹が進入し密集した荒れた状態となっている。(西光)

#### 第2節、測量調査成果

カヅマヤマ古墳は東西に伸びる低位丘陵の南側斜面を利用して築かれている。墳丘の背後には終末期古墳の特徴である古墳造成時の切断面が明瞭に残っている。墳丘上には幅2m、深さ1mの大規模な盗掘坑が存在し、南側にも盗掘坑が存在している。盗掘坑周辺には漆喰の付着した結晶片岩の破片が多数散乱しており、一部に流紋岩質溶結凝灰岩の破片も含まれている。墳丘部分は中央から東側部分が削平され平坦になっており、墳丘の中央部から南側には約2mの段差が認められる。墳丘の南側部分の等高線は大きく乱れており攪乱等の影響と考えられる。墳形については現状からは当時の姿を復元することは困難ではあるが墳丘西側部分の標高135.500m～137.000mにかけてと墳丘東側部分の標高131.500m～136.000mにかけて等高線が直線的な箇所が認められ、墳丘西側の標高134.750～135.250mにかけて東に屈曲するコーナーと推定される箇所が確認できることから方墳であると考えられる。規模については墳丘が丘陵の南側斜面に築かれていることや墳丘裾部が不明瞭であることから判断しがたいが東西の現状裾部の傾斜変換線を計測すると一辺約15mとなる。しかし本来の墳丘裾は更に広がるものと推定されることから実際の規模は一辺20m以上の方墳になると考えておきたい。高さについては現状の墳丘裾部の傾斜変換線から現墳頂までの見かけ状の高さは約10mである。墳丘背後の切断面は標高137.500～142.000mにかけて削りだされており、比高差は約8mを測る。切断面の最大幅は東西約100mで等高線は墳丘を囲むように「コの字」状を呈している。切断面と墳丘裾部の間には約10mの平坦面が存在するが現状からは掘り割り等の有無については確認できない。(松谷)

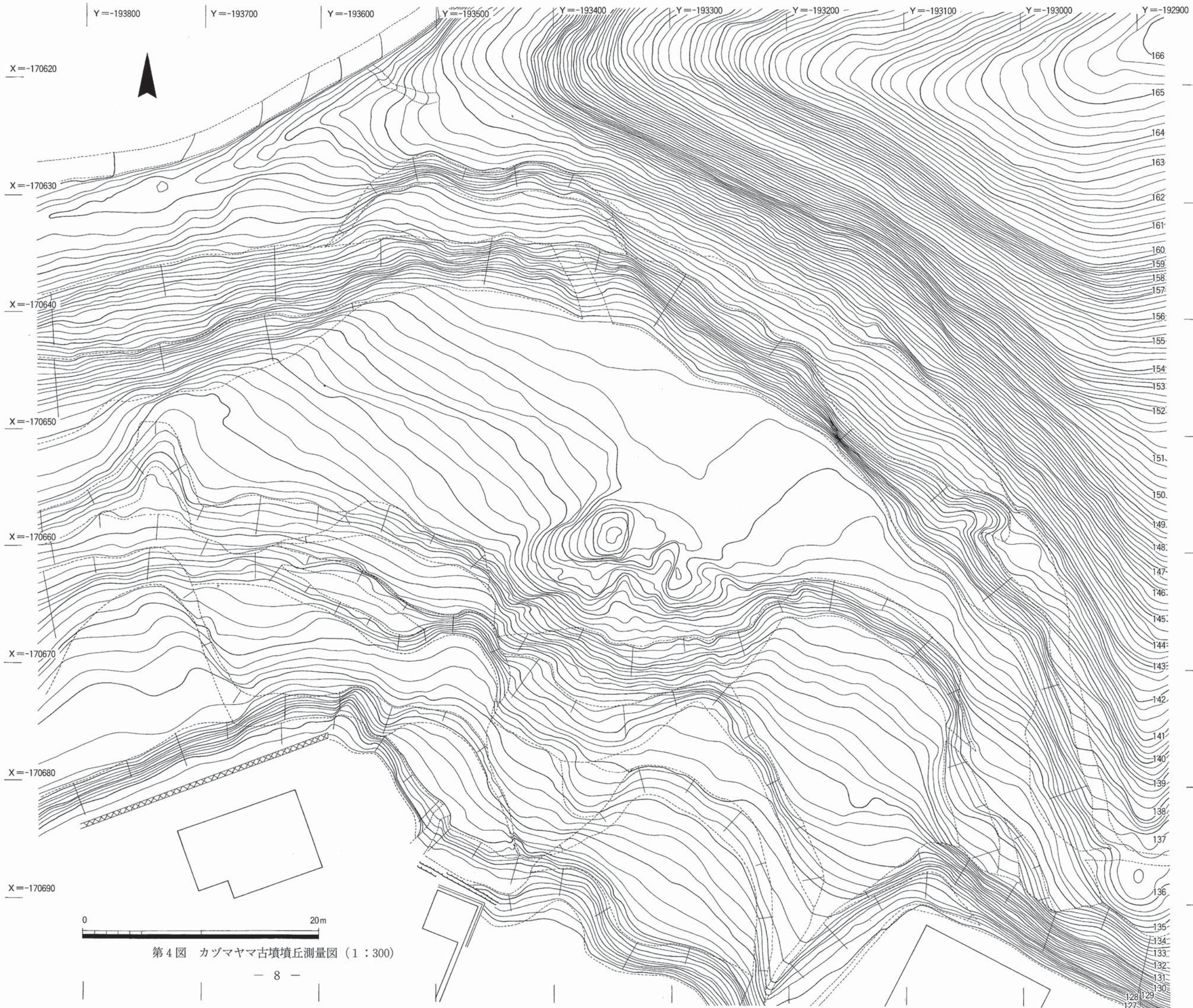


第2図 カズマヤマ古墳位置図 (1:2000)



第3図 カズマヤマ古墳周辺地籍図





第4図 カズマヤマ古墳墳丘測量図 (1 : 300)

### 第3節、表採遺物

盗掘孔周辺には石墨片岩等の破片が散乱しており、測量時には石墨片岩の板石一点を表採している。板石は長辺36cm、短辺約26cm、厚さ3.5~6.8cmを測る。形状は長方形を呈し、表面には漆喰が付着している。また古墳の南側にある個人宅の壁面には以前古墳から下ろされたとされる長辺1.8m、短辺約40cmの結晶片岩が埋めこまれている。これ以外にも地ノ窪集落内の石垣に多くの結晶片岩が転用されており、早くから石取りの対象となっていたことが窺える。

(西光)

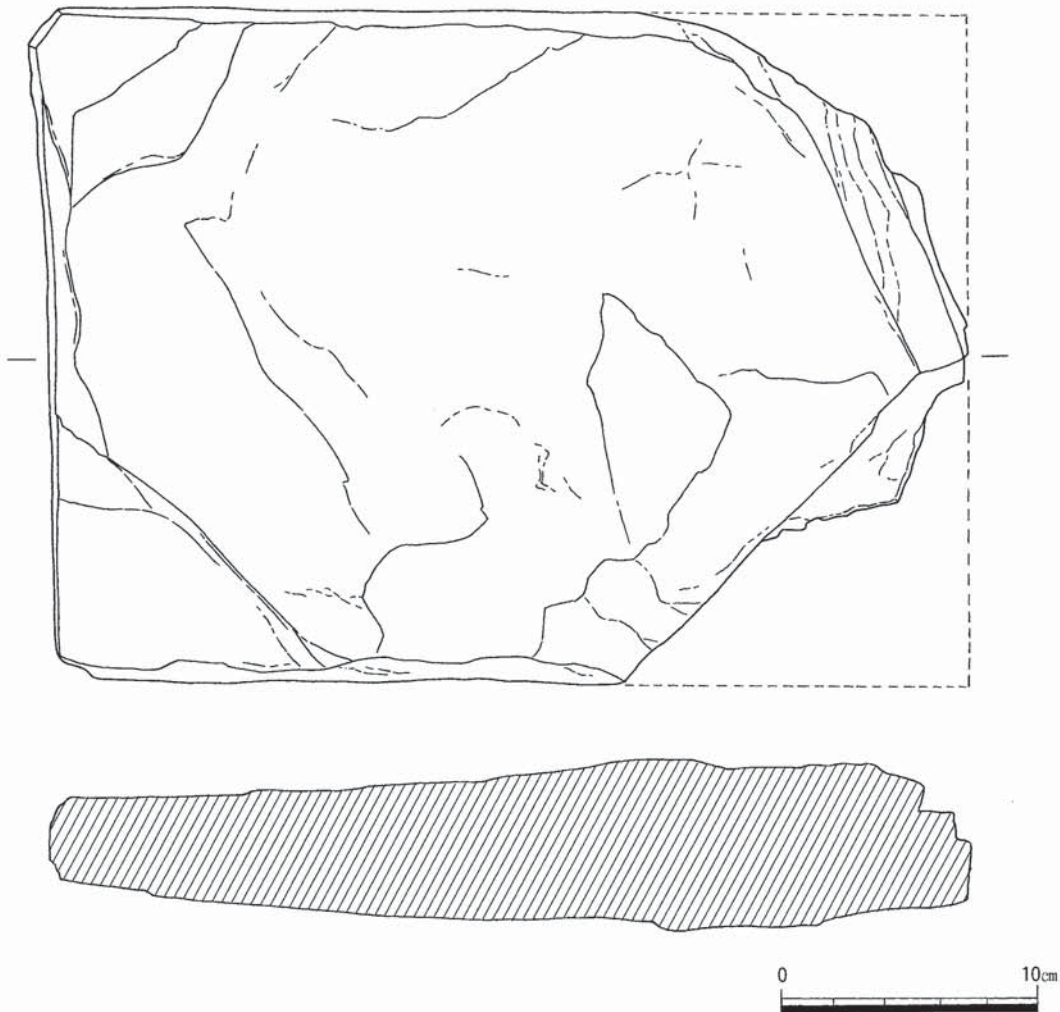
#### 【参考・引用文献】

高市郡役所1923 『高市郡古墳誌』

奈良県立橿原考古学研究所編1972 『奈良県遺跡地図』第2分冊 奈良県教育委員会

関川尚功・卜部行弘1987 『与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書 第56集 奈良県立橿原考古学研究所

西光慎治2004 「飛鳥地域の地域史研究(5)結晶片岩使用古墳研究序説」『明日香村文化財調査研究紀要 第2号』明日香村教育委員会



第5図 カヅマヤマ古墳表採石材 (1:3)

## 第4章 庚申塚古墳測量調査報告

### 第1節、はじめに

庚申塚古墳は奈良県桜井市大字山田小字八ノ坪570番地他に所在する終末期古墳である。本墳は北から南に伸びる低位丘陵の頂部に位置し、南には古代の幹道「山田道」を眼下に見下ろせる絶好の場所にある。庚申塚古墳のある地域には終末期古墳は存在しないが北側には南山古墳群が南に八釣・東山古墳群、東方には小立古墳が存在している。庚申塚古墳については測量調査に際し、現地踏査を行ったが『奈良県遺跡地図(第2分冊)』の14-D-303に記されている場所は現在、畑地となっており、古墳の存在を示すような状況が認められなかった。そのため踏査地域を拡大して古墳の所在地について調査した結果、303の場所から西へ直線距離で約70mの地点で流紋岩質溶結凝灰岩(以下、榛原石)が散乱している地点を確認した。榛原石が散乱している範囲は東西約5m、南北約10mの限られた範囲であるが、現状では墳丘等の痕跡は認められない。実際、この場所に古墳が存在したか判断しがたいが漆喰の付着した榛原石片が多く存在し、厚さ20cm近くもある大きな破片も含まれていることからこの一帯が庚申塚古墳のあった場所であると想定しておきたい。榛原石が散乱する場所から県道へ続くコンクリート舗装された里道があるがこの里道の工事の際にも地固めに榛原石が使用されたと言われている。この場所の小字は「荒神峯」といい、地元では「こじがみね」と呼ばれており、近年まで木製の祠に「庚申さん」が祭られていたという。また八ノ坪周辺は大字山田の集団墓地となっており地元では「古墓・こばか」と呼ばれている。墓石の中には「文化2(1805)年」「文政13(1830)年」「弘化4(1847)年」と刻まれた榛原石の墓石も含まれており、石材が最近持ち込まれたものでないことを裏付けている。今回、榛原石が散乱する場所を中心に約2000㎡にわたって測量調査を実施した。調査期間は1999年6月～10月にかけて休日を利用して行った。(西光)

### 第2節、測量調査成果

庚申塚古墳は南北に伸びる低位丘陵の頂部に位置している。現状では墳丘状の高まりは確認することはできない。榛原石片が散乱している場所は墓地の造成等で削平されているが、南北に伸びる標高131.500～132.500m付近の西側斜面に多く認めることができる。この場所は現在、果樹園となっており墓地よりも一段低くなっているが旧地形はもう少し高かったらしく農地造成によって削平されていることがわかる。散乱している榛原石については漆喰が付着したものが多く認められる。墓石の一部に榛原石の板石が転用されており、墓地と西側の高所との比高差は1.5～2mを測る。(丹)

### 第3節、表採遺物

#### 1、土器

土器の破片は墓地西側の標高131.750m付近の果樹園で表採したものである。

1～3は須恵器甕の体部の破片である。いずれも内面は同心円文の叩き目が施され、外面は格子状の叩き目が施されている。

#### 2、石材

石材はすべて流紋岩質溶結凝灰岩(榛原石)で墓地の西側斜面で表採または現地で計測したものである。

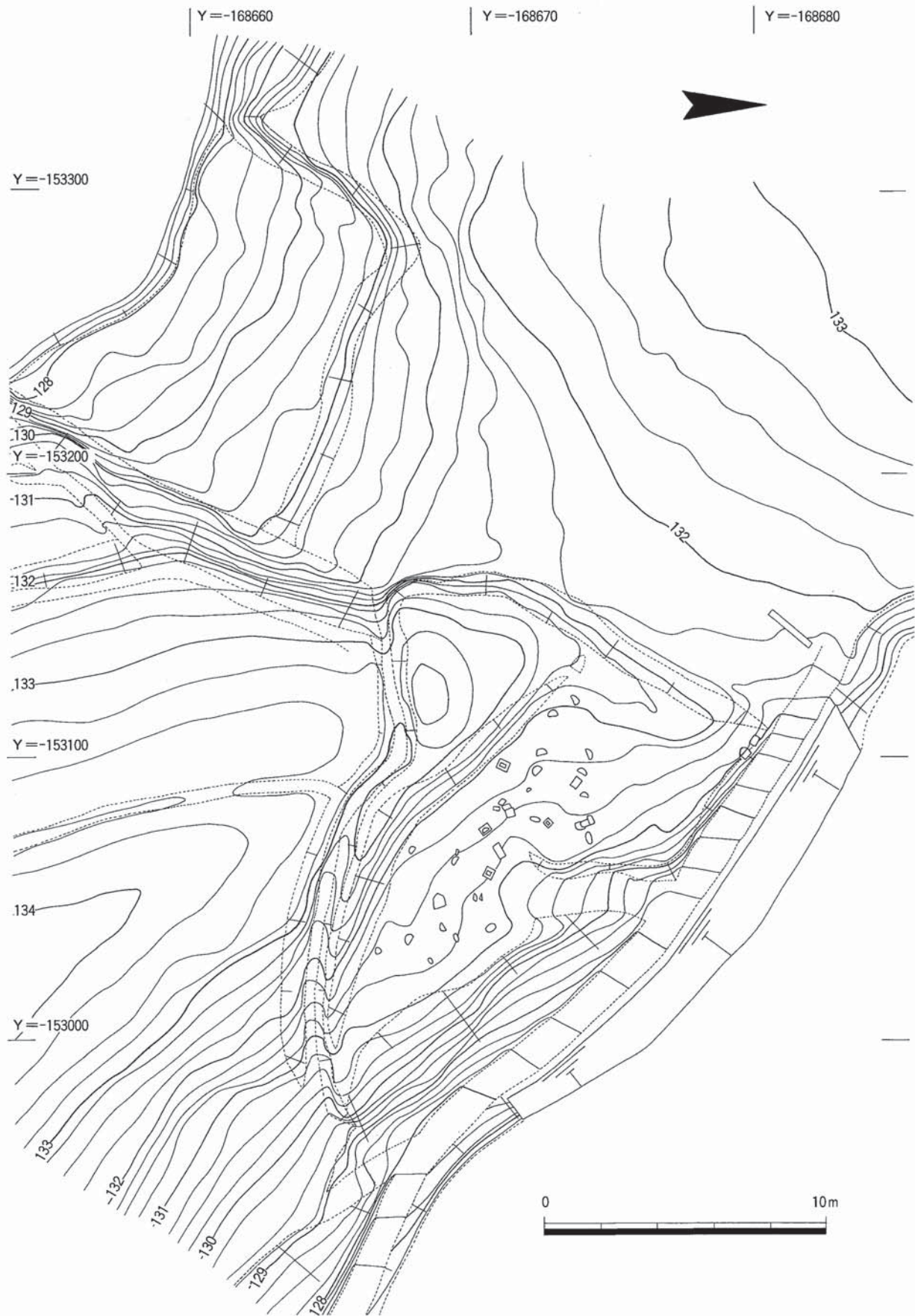
1は長辺21cm以上、短辺13cm以上、厚さ4.4cmである。2は長辺13cm以上、短辺17.8cm、



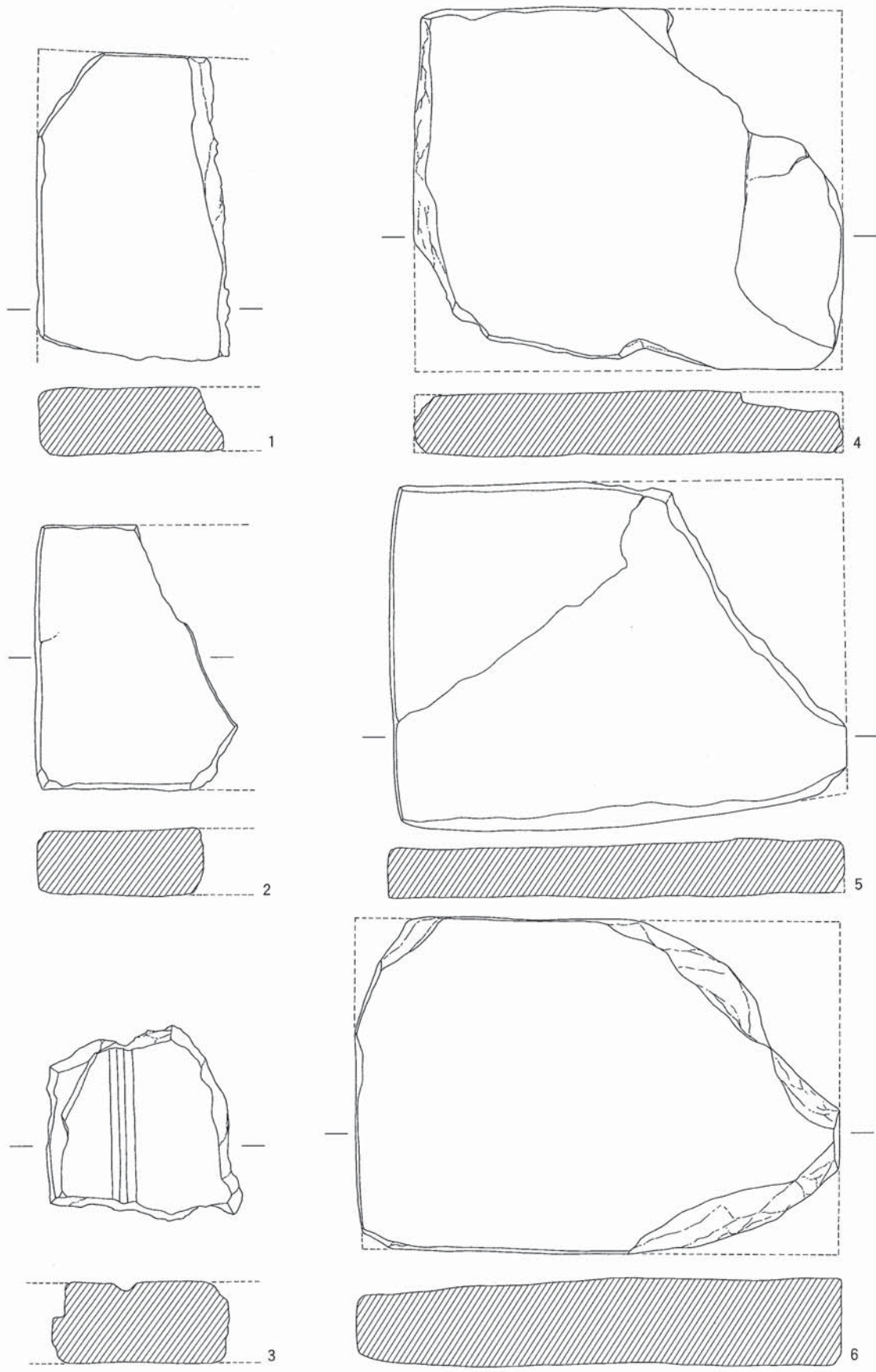
第 6 図 庚申塚古墳位置図 (1 : 2000)



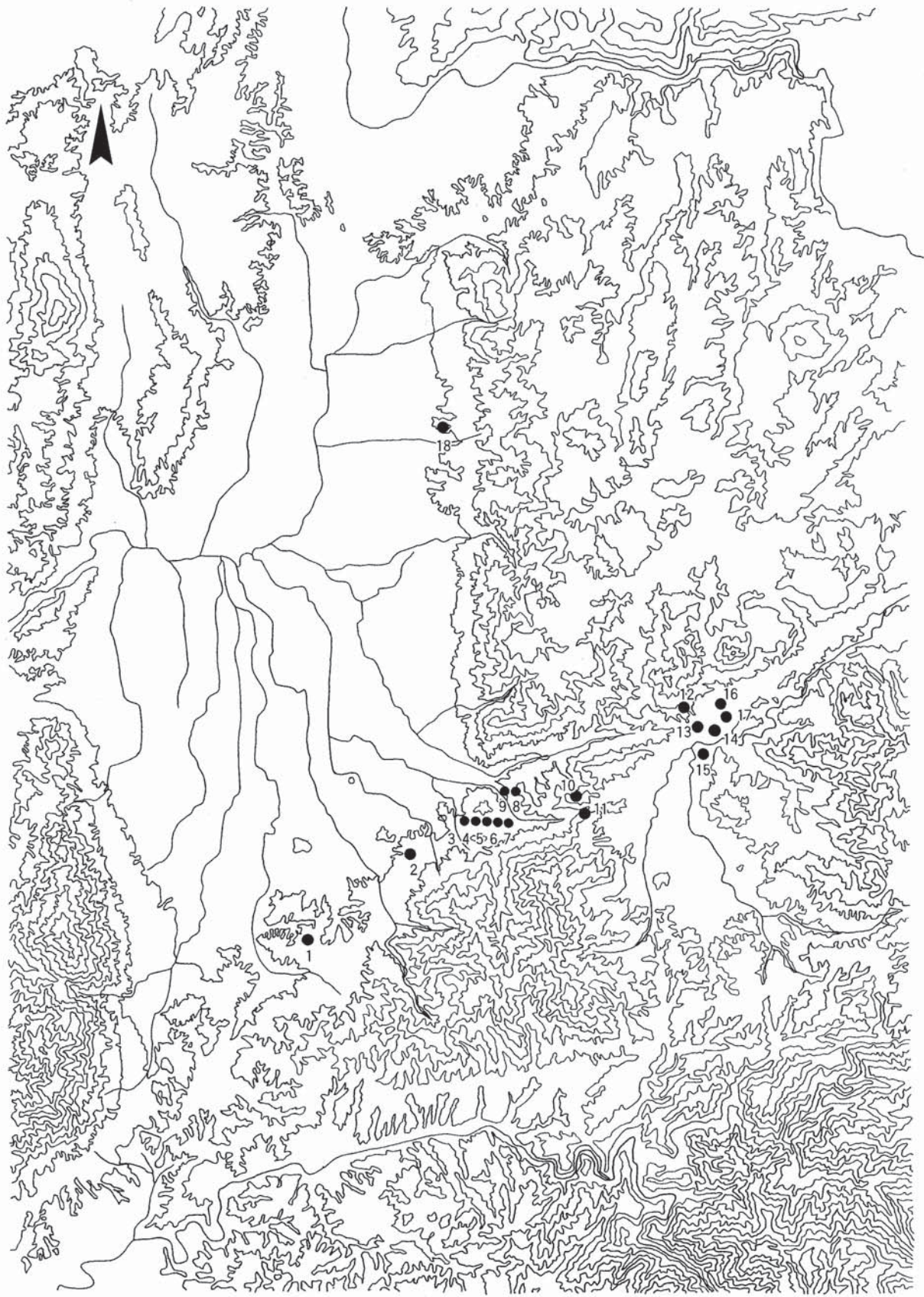
第 7 図 庚申塚古墳周辺地籍図



第8図 庚申塚古墳周辺測量図 (1 : 200)



第9図 庚申塚古墳表採石材(1:4)



第10図 大和における磚積石室墳分布図(番号は表1に対応)

	古墳名	所在地	墳形	規模	参考文献
1	カヅマヤマ古墳	明日香村	方墳	24m	本報告
2	庚申塚古墳	桜井市	—	—	本報告
3	舞谷1号墳	桜井市	方墳	14×9m	磚槨墳研究会1994『舞谷古墳群の研究』
4	舞谷2号墳	桜井市	方墳	10.6×9m	同上
5	舞谷3号墳	桜井市	方墳	14.6×9.47m	同上
6	舞谷4号墳	桜井市	方墳	14.4×10m	同上
7	舞谷5号墳	桜井市	方墳	15×10m	同上
8	忍坂8号墳	桜井市	円墳	12m	前園實知雄他1978『桜井市外鎌山北麓古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
9	忍坂9号墳	桜井市	円墳	11m	同上
10	花山西塚古墳	桜井市	円墳	—	網干善教他『飛鳥・磐余地域の終末期古墳と古代寺院』奈良県立橿原考古学研究所
11	花山東塚古墳	桜井市	円墳	17m	同上
12	南山古墳	宇陀市	円墳	18m	柳澤一宏1994『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書1993年度』榛原町教育委員会
13	西峠古墳	宇陀市	円墳	11m	井ノ谷 守1990「宇陀の一磚槨墳」『古代学研究』120 古代学研究会
14	神木坂2号墳	宇陀市	方墳	15m	柳澤一宏1988『神木坂古墳群Ⅱ』榛原町教育委員会
15	丹切33号墳	宇陀市	—	—	堀田啓一他1975『宇陀・丹切古墳群』奈良県教育委員会
16	奥ノ芝1号墳	宇陀市	円墳	10m	泉森 皎他1972『宇陀福地の古墳』奈良県立橿原考古学研究所
17	奥ノ芝2号墳	宇陀市	円墳	10m	同上
18	帯解黄金塚古墳	奈良市	方墳	26m	西光慎治2004「帯解黄金塚古墳の沿革」『地域と古文化』地域と古文化刊行会

表1 大和における磚積石室墳一覧

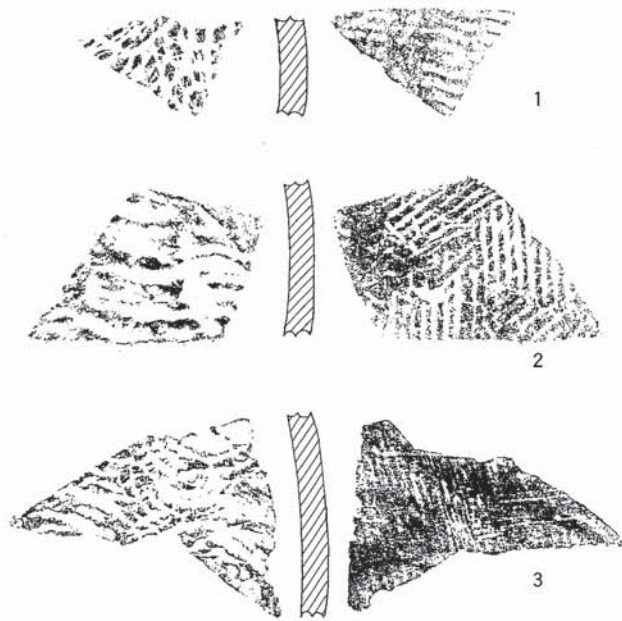
	古墳名	所在地	墳形	埋葬施設	棺台	棺
1	野口王墓	明日香村	八角形墳	横口式石槨	金銅製?	夾紵棺
2	牽牛子塚古墳	明日香村	八角形墳	横口式石槨	凝灰岩	夾紵棺
3	聖徳太子墓	太子町	多角形墳?	横穴式石室	凝灰岩?	夾紵棺
4	御嶺山古墳	太子町	円墳	横口式石槨	凝灰岩	漆塗木棺
5	阿武山古墳	高槻市	円墳	横口式石槨	磚積	夾紵棺
6	カヅマヤマ古墳	明日香村	方墳	磚積石室	磚積	漆塗木棺
7	塚廻古墳	河南町	方墳	横口式石槨	磚積?	漆塗籠棺・夾紵棺
8	アカハゲ古墳	河南町	方墳	横口式石槨	磚積?	漆塗籠棺・夾紵棺
9	束明神古墳	高取町	八角形墳	横口式石槨	木製?	漆塗木棺

表2 棺台と漆棺使用古墳一覧



厚さ4.4cmを測る。3は長・短辺約13cm、厚さ5.6cmで表面に幅1.6cm、深さ5mmの溝状の窪みが施されている。4は長辺28.8cm、短辺24cm、厚さ4.2cmを測り、正方形に近い形状を呈している。5は長辺30cm、短辺23cm、厚さ4cmで正方形に近い。6は長辺32.4cm、短辺22.4cm、厚さ5.4cmで長方形を呈している。この石材は墓石に転用されているものである。

以上、石材については正方形に近いタイプと長方形のタイプの2種類存在していることが明らかとなった。また石材の小口面は小タタキ調整により丁寧に加工され面がつくられている。(西光)



第11図 庚申塚古墳表採遺物(1:2)

#### 【参考・引用文献】

猪熊兼勝1982 「飛鳥の古墳」『季刊明日香風』第3号 (財)飛鳥保存財団

飛鳥資料館編1981 『山田寺展』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録第8冊

## 第5章 総括

今回、飛鳥地域の磚積石室墳の測量調査を実施することができた。大和において磚積石室墳は18基確認されており、その大半が桜井市から宇陀市にかけて分布している。現在、確認されている磚積石室墳については流紋岩質溶結凝灰岩(通称榛原石)が使用されたものばかりでカヅマヤマ古墳のように結晶片岩を使用した例は確認されていない。大和における結晶片岩使用古墳については60例ほど確認されているが吉野川流域で石室材として採用されている以外は盆地内では大半が石棺材として採用されている(西光2004)。使用年代についても6世紀前半から7世紀初が全盛期でそれ以降になると排水溝などの一部に使われる程度となり、盆地内で石室材として大量に使用される例はカヅマヤマ古墳のみである。飛鳥地域でも結晶片岩を使用した古墳は12例確認されておりその内、石棺材が6例と半数を占め、細川谷古墳群の3例を除く9例は高取川左岸の地域に分布している。これらの古墳は大半が6世紀後半～7世紀中頃のものでこの時期、巨勢路(紀路)沿いの古墳に結晶片岩を使用した例が多く確認されている。逆に4世紀から6世紀初頃にかけては巨勢路(紀路)沿いではなく葛上・宇智斜行道沿いに結晶片岩を使用した遺跡が点在していることから、結晶片岩の採石地である吉野川流域と盆地内を繋ぐ二つの幹線道の開発と整備が大和における結晶片岩使用古墳の展開に大きく影響をあたえていたことは間違いなさであろう。榛原石を使用した磚積石室墳についても初瀬街道や女寄峠から桜井に至るルート沿いにまた庚申塚古墳は山田道沿いに立地するなど結晶片岩と同様に当時の幹線道沿いに立地していることは興味深い。カヅマヤマ古墳については2006年に明日香村教育委

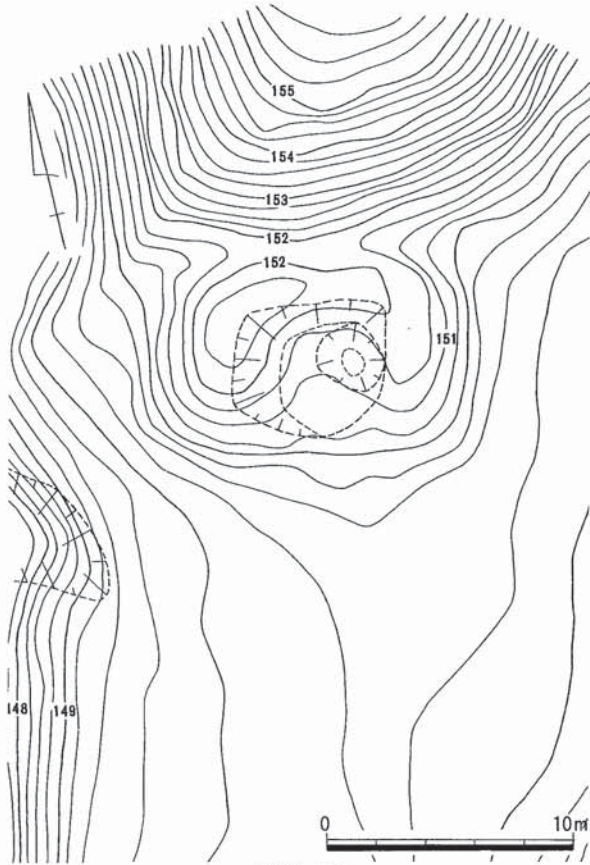
	古墳名	所在地	墳形	埋葬施設	棺台	棺
1	マルコ山古墳	明日香村	六角形墳	横口式石槨	無	漆塗木棺
2	キトラ古墳	明日香村	円墳	横口式石槨	無	漆塗木棺
3	高松塚古墳	明日香村	円墳	横口式石槨	無	漆塗木棺
4	石のカラト古墳	奈良市	上円下方墳	横口式石槨	無	漆塗木棺
5	平野塚穴古墳	香芝市	円墳	横口式石槨	無	漆塗籠棺
6	シシヨツカ古墳	河南町	方墳	横口式石槨	無	漆塗籠棺
7	初田2号墳	高槻市	円墳	横穴式石室	無	漆塗木棺
8	岩内1号墳	御坊市	方墳	横穴式石室	無	漆塗木棺

表3 漆棺使用古墳一覧

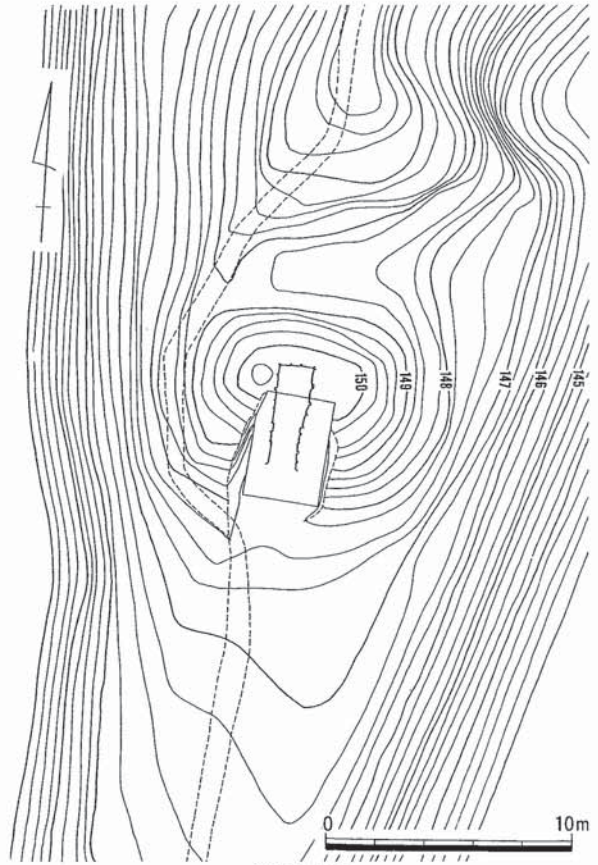
員会による発掘調査が行われ、墳丘は一辺約24mの方墳で結晶片岩を使用した磚積石室には棺台が存在し、漆塗木棺を内蔵した7世紀後半の終末期古墳であることが明らかとなった。畿内における7世紀代の古墳で棺台を有する古墳についてみると漆棺が使用されている例が多い。飛鳥地域では野口王墓(夾紵棺)や牽牛子塚古墳(夾紵棺)で確認されている。一方、棺台を備えた古墳でも漆棺を採用していない例(平野2号墳他)や、漆棺でも棺台を有していない古墳(高松塚古墳他)もあり漆棺と棺台の関係については更に検討が必要である。墳丘については測量時に確認した墳丘南側の段差が地震の影響で地滑りを引き起こしていたことも明らかとなった。明日香村内では他に酒船石遺跡(白鳳南海地震)や高松塚古墳で地割れ跡が検出されるなど飛鳥地域を襲った大規模な南海地震の被害状況の一端が明らかになりつつある。また墳頂東側にあった盗掘坑は明治期によるもので墳丘南側の盗掘坑については12～13世紀にかけての石室西側石の石取りに伴うものであることも判明している。墳丘背後の切断面については現地表面から更に2.5m下で裾部が検出されており、切断面の高さは約10mということになる。切断面と墳丘裾部の間には幅3mの掘り割りも確認され測量時、墳丘背後で確認された平坦面は後世の堆積で形成されたものであることが明らかとなっている。このようにカヅマヤマ古墳については発掘調査により測量時にみられた段差や等高線の乱れが単なる削平や攪乱ではなく、地震に伴う地滑りであるといった新たな知見も得られておりカヅマヤマ古墳を考える上で重要なデータを提示する結果となった。庚申塚古墳については広範囲の測量により流紋岩質溶結凝灰岩の分布の範囲を明らかにし、庚申塚古墳があったと考えられる位置を特定することができた。今後は周辺部の調査成果の蓄積が望まれる。(西光)

【参考・引用文献】

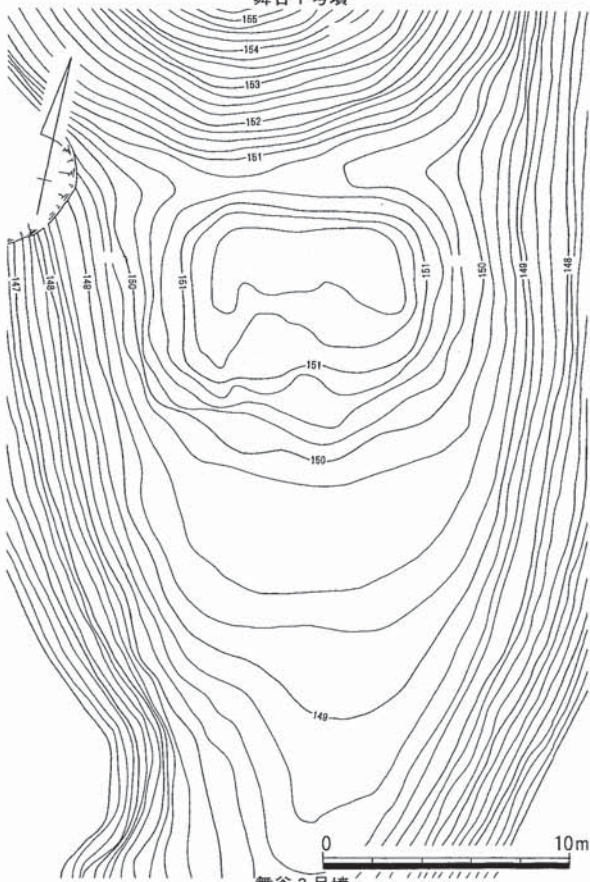
- 飛鳥資料館編1981『飛鳥時代の古墳』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録  
 明日香村教育委員会2005「カヅマヤマ古墳の調査」『明日香村発掘調査報告会資料』



舞谷1号墳



舞谷2号墳



舞谷3号墳

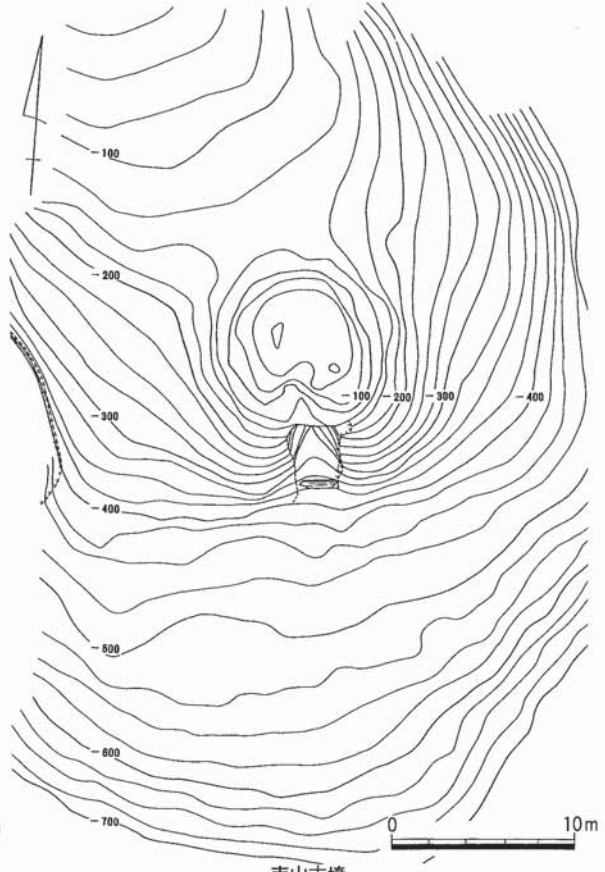


舞谷4号墳

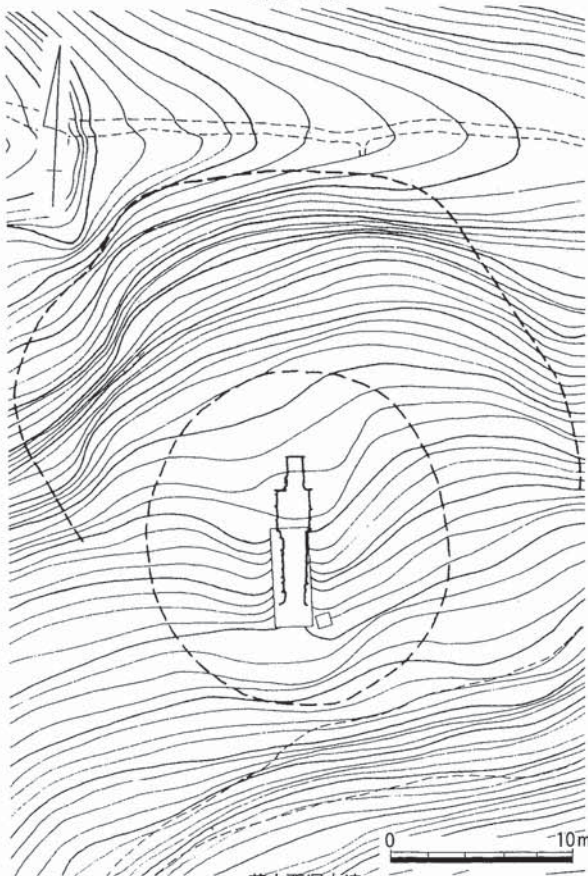
第12図 大和の磚積石室墳(1)



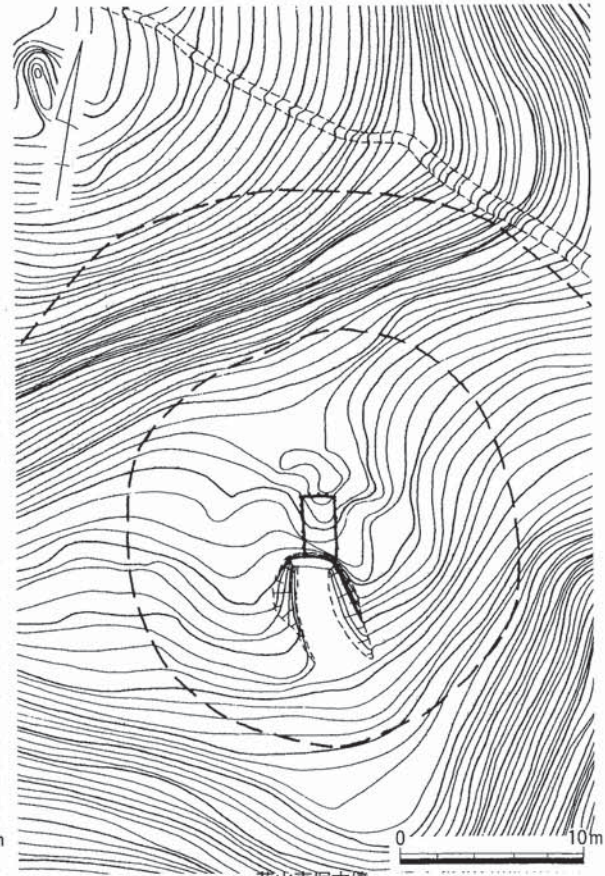
舞谷5号墳



南山古墳

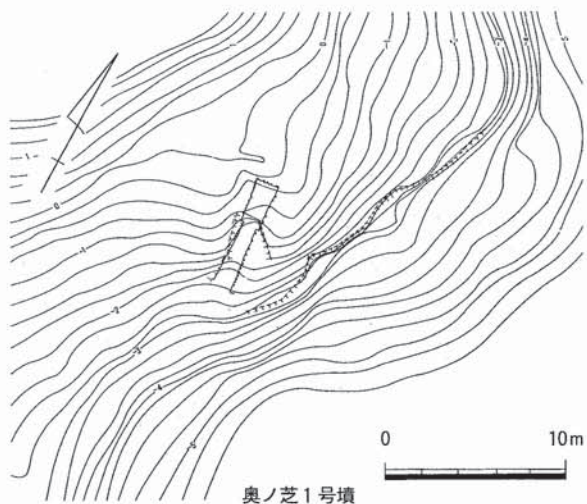


花山西塚古墳

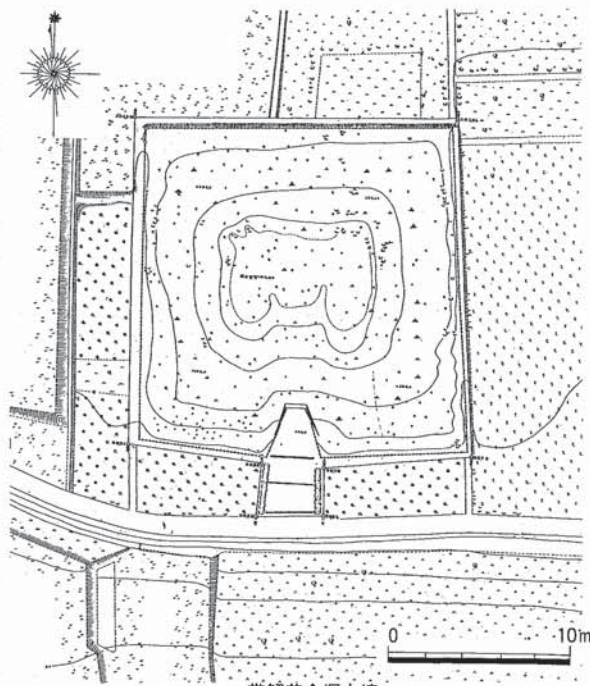


花山東塚古墳

第13図 大和の磚積石室墳(2)



奥ノ芝1号墳



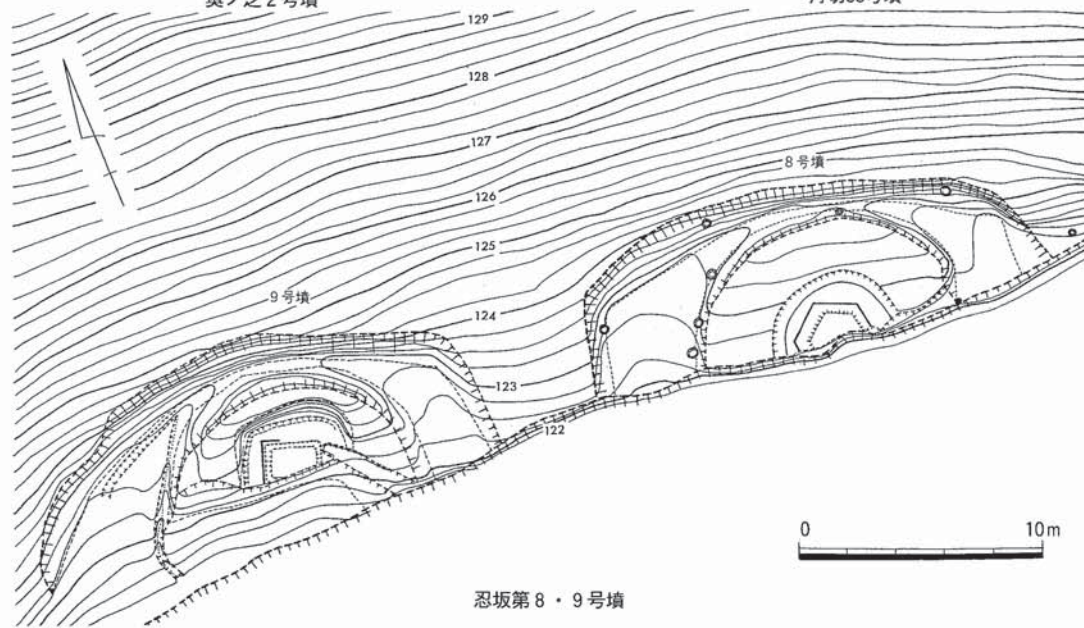
帯解黄金塚古墳



奥ノ芝2号墳



丹切33号墳



忍坂第8・9号墳

第14図 大和の磚積石室墳(3)

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	おうりょうのちいきしけんきゅう							
書 名	王陵の地域史研究							
副 書 名	飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告 I							
巻 次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著 者 名	西光慎治・丹 俊詞・松谷久史							
編 集 者	西光慎治							
編 集 機 関	明日香村教育委員会文化財課							
所 在 地	〒634-0103 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥116番地 TEL0744-54-5600 FAX0744-54-5602							
発行年月日	西暦2006年 3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
カヅマヤマ古墳	奈良県高市郡明日香村大字真弓232-1他			34°27'41"	135°47'22"	1998.6～2002.12	約6300m <sup>2</sup>	測量調査
庚申塚古墳	奈良県桜井市大字山田小字八ノ坪570他			34°29'8"	135°49'40"	1999.6～1999.10	約2000m <sup>2</sup>	測量調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
カヅマヤマ古墳	古墳	飛鳥時代	磚積石室	土師器・須恵器 漆塗木棺片・鉄釘他		一辺約24mの方墳で結晶片岩を使用した磚積石室墳		
庚申塚古墳	古墳	飛鳥時代	—	須恵器 流紋岩質溶結凝灰岩		流紋岩質溶結凝灰岩を使用した磚積石室墳		